



教職支援部門

ニューズレター

巻頭言

深刻化する教師不足と本学の教職課程の動向

教師不足の状況は年々深刻さを増している。文部科学省が令和8年3月5日に公表した令和7年度「教師不足」に関する実態調査では、公立学校で全国3,827人の教師が不足していることが明らかになった。教師需要の増加と教職志望者の減少が同時に進行した結果、不足人数はこの4年間で約2倍に膨らんでいる。新年度を迎えても臨時的任用教員を確保できず、学校に配置される教師数が規定の配当数に満たない事態が各地で生じている。

私自身も3年前まで中学校に勤務しており、新年度の臨時的任用教員を確保するために半年近く人材を探し続けた経験がある。当時は本学教職支援センターにも問い合わせたほどで、手を尽くして何とか3名を確保して欠員を回避したが、現場の厳しさを身をもって痛感した。

では、教員免許状を取得する学生の状況はどうか。文部科学省の教員免許状取得状況調査によると、大学等の新規卒業・修了者の免許状取得者数は、令和5年度が90,377人、令和6年度が88,705人であり、こちらも減少傾向にある。

こうした全国的な状況を踏まえると、本学の教職課程履修者の動向が気になるところである。ただし、教職課程認定を受けている5学部(人文・理・工・農・繊維)では、教職課程が卒業要件ではないため、履修の中断や途中からの履修が一定数あり、人数の把握が難しい点をあらかじめお伝えしておきたい。調査の結果、今年5月21日時点での教職課程履修者数は、4年生133人、3年生169人、2年生177人、1年生232人であった。例年、学年が上がるにつれて一定数が履修を中断することを考慮しても、全国の傾向とは異なり、本学では増加傾向が見られる。なお、令和8年度の5学部の入学者数は合計1,348人であり、1年生においては実に17.2%、つまり6人に1人が自分の専門に加えて教職課程を履修していることになる。

学生が教職課程を履修することになった動機について、令和6年度後期に本学の4年生(教職課程を最後まで履修した学生)に実施したアンケートでは、以下の5つのパターンに分類できた。

- ①将来志向・選択肢拡大型 (39%) 「将来の選択肢を広げるため」「進路の幅を増やすため」
- ②明確な教職志望型 (26%) 「教員になるため」「教師になりたいと思っていた」
- ③興味・関心型 (17%) 「教職に興味があった」「教育に興味があった」
- ④資格取得型 (11%) 「資格が欲しかった」「教員免許を取得したかった」
- ⑤外的影響型 (7%) 「親に勧められた」「高校の先生に向いていると言われた」

最も多かったのは「将来の選択肢を広げるため」であり、専門の学びに加えて将来の可能性を広げたいという学生の気持ちが伺える。進路を柔軟に考えたいという思いが、回答の中に自然に表れている。

履修者増加の背景を一概に断定することはできないものの、学生が将来に対して漠然とした不安を抱えていることは一因として挙げられるだろう。AIによる職業の代替可能性が広く語られていることや、終身雇用が前提が弱まりつつある状況も、学生の意識に影響を及ぼしていると考えられる。こうした社会状況の中で、セカンドキャリアの選択肢として教職免許を捉える学生が増えている様子も見受けられる。実際に、「卒業後は一旦民間企業に勤め、40歳頃になったら教員として働きたい」という将来像を描き、その準備として教職課程を履修している学生も少なくない。学生が描く多様なキャリアの可能性を、教職支援の立場から丁寧に支えていきたい。

藤井善章(教育基盤構築センター 教職支援部門長)

参考文献

文部科学省:令和7年度「教師不足」に関する実態調査の結果

(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/mext_00018.html)

文部科学省:教員免許状取得状況等調査について

(https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/1353327.htm)



2025年度実施介護等体験の記録

◆介護等体験とは

介護等体験は、小学校・中学校の教員免許状取得を希望する学生が、特別支援学校や社会福祉施設等で行う体験活動です。学生は、高齢者、障害のある方、支援を必要とする子どもたちと実際に関わりながら、学校教育だけでは見えにくい生活・福祉・支援の現場について学びます。教員を目指すうえで、多様な人々と共に生きる社会への理解を深める機会となっています。

令和7年度は、特別支援学校および社会福祉施設において、介護等体験を実施させていただきました。特別支援学校では、授業や創作活動の補助、児童生徒との会話や遊び、表情・身振りを交えた関わりなどを経験しました。社会福祉施設では、高齢者との談話、レクリエーションへの参加、利用者の作業補助や生活支援、職員の方々の業務の見学・補助などを行いました。

ここでは、体験を通じて得られた学生たちの成長の一部をご紹介します。（横嶋 敬行）

人文学部 現4年生 （Tさん）

人と関わっていくなかで、年齢や、障害・病気の有無は、あまり重要なことではないということを感じた。実際に視覚障害を持つ人と関わるのは初めてで、自分がどのように児童の皆さんと関わるができるのか、まったく想像できず、とても不安だった。うまく言葉にできないけれど、体験に行く前は、特別支援学校に行っている児童生徒と、通常の学校に通っている児童生徒はどこか「ちがう」と思い込んでいたのかもしれない。

私は「相手に障害があること」を不安に思っていたが、それよりも「今もこれからもぐんぐん成長している子どもたちなんだ」という視点で関わるのができたよかったなと感じた。障害や病気の有無、年齢などの属性を頼りにして関わるのではなく、同じ人間として目線を合わせて関わっていきたくと、介護等体験を通して感じた。

人文学部 現4年生 （Mさん）

自分の想像力だけで想定できる範囲にはもちろん限界があり、本実習を通して実際に見聞きすることで自分の中での身体に不自由を抱える人々の解像度が上がった。

介護等体験自体、実際に行ってみるまではなぜ教職課程に必修として組み込まれているのか疑問だったが、肢体不自由な方とその介助の実態を知るとともに、学校現場に立つ前に人との関わり方を知るという点において必要な経験であったと感じた。介護等体験実施以前は少なからず、心身に不自由を抱える人に対して健常者の自分が「～してあげる」という意識があったように思う。しかし、本実習を通してあくまで対等な関係性の人間として、円滑な日常生活の手伝いをさせていただくという考え方を理屈としてではなく、実感して意識することができた。

理学部 現3年生 （Oさん）

支援する側の思いやりや配慮が相手の安心や信頼につながることを学んだ。支援は単に日常生活を代わりに行うのではなく相手主体として接することであると考えた。教員として生徒の成長を支えるためには、生徒の可能性を信じ、できることを引き出す関わりが必要である。介護の現場で見た「できることは本人に任せる」という考え方は、教育の場面にも通じるものがある。生徒の主体性を大切にしながら支援することで、生徒自身の自信や意欲を育てることにつながると思う。



**工学部 現4年生 (Uさん)**

特別支援学校では知的障害のある児童生徒の学習や生活支援を中心に体験を行った。体験を通して児童生徒一人ひとりをよく観察し、小さな変化や成長を見逃さない姿勢の重要性を学んだ。一方で、自分自身は適切な声かけや関わり方に戸惑う場面もあり、障害特性への理解不足を反省点として感じた。今後は、特別支援教育に関する知識を深め、相手の立場に立った支援ができるよう心掛けていきたい。また、社会福祉施設では利用者の日常生活支援を中心に、見守りや簡単な介助、職員の補助業務を体験した。利用者一人ひとりの身体状況や生活リズムに配慮しながら支援が行われており、安全と尊厳を守ることが常に意識されていた。体験を通じて、介護や福祉の現場では身体的な支援だけでなく、利用者の気持ちに寄り添ったコミュニケーションが重要であると感じた。様々な障害を持った方々の接し方や話し方を理解しながら今後の社会生活を営まなくてはならないと思った。介護等体験を通して、安心感を与える声かけや態度、周囲の教職員や関係機関との連携の大切さを意識しながら学習を深め、将来の教育現場において誰一人取り残さない支援ができる教員を目指していきたい。

**農学部 現4年生 (Eさん)**

今回の体験活動を通して、私は「教育とは知識を教えること以前に、人と向き合う営みである」ということを強く実感した。利用者の方の中には、身体的な制限や認知症によって不安を抱えやすい方も多く、何気ない声掛けや態度一つが、その日の安心感を大きく左右する場面を何度も目にした。職員の方々は利用者の過去の生活や性格を踏まえながら接しており、「その人らしさ」を大切にする姿勢が印象に残った。教師が生徒の小さな変化や成長を見逃さず成功体験を積み重ねるよう支援している姿から、教育の本質は「できる可能性を広げること」にあると気づかされた。

これらの体験を今後の教職の学びに活かすために、私は3つの視点を大切にしたい。第一に、相手の立場に立って考える想像力を養うことである。教科指導においても、生徒がどこでつまづいているのか、どのような不安を抱えているのか想像することで、より適切な支援が可能になると考える。第二に、観察する力を高めることである。表情や態度、発言の変化に気づくことは、学習面だけでなく生活面の支援にもつながる。第三に失敗や戸惑いを否定せず、学びの過程として受け止める姿勢を持つことである。これは生徒に対してだけでなく、教員自身が成長し続けるためにも重要だと感じた。今後はこの経験を単なる思い出で終わらせるのではなく、日々の教職に関する講義や今後の教育実習の中で振り返りながら、自分自身の教育観を深めていきたい。そして教員の道に進むのであれば、目の前の一人を大切にできる教員になることを目標に学びを積み重ねていきたい。

繊維学部 現4年生 (Mさん)

体験前はどのように接すればよいのかという不安や、うまくコミュニケーションが取れるだろうかという心配があった。しかし実際に活動する中で、人と関わる上で大切な姿勢や支援の在り方について多くの学びを得ることができた。特別支援学校での体験活動で印象に残ったことは、生徒一人ひとりが自分らしく生き生きと活動していたことである。私はこれまで特別支援学校を訪れた経験がなく、障がいのある生徒との関わりについて漠然とした不安を持っていた。しかし実際には、生徒たちは明るく積極的に話かけてくれ、授業や活動にも楽しそうに取り組んでいた。

支援とは「してあげること」ではなく、その人の力や思いを尊重しながら寄り添うことであると感じた。「ありがとう」という言葉や笑顔を向けていただいたことはとても印象に残っており、人と関わることの温かさや喜びを強く感じるすることができた。

教職支援部門 5～7月の動き

- 朝日村未来塾開講式(5/9) ○上田市教委訪問(5/12) ○伊那市教委訪問(5/20)
- 山形村未来塾開講式(5/23) ○小川村未来塾開講式(5/23) ○南箕輪村教委訪問(5/27)
- 長野県総合教育センターとの連絡協議会(6/10) ○CST養成プログラム実施委員会(6/10)
- 第1回教育基盤構築センター教職支援部門運営部会(6/22)
- 学芸員養成課程実施分科会(7/29)

教採関係学習会について

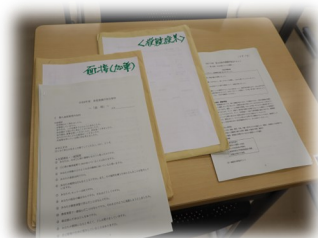
学び合いと対話を築く



「教採関係学習会」とは、教職を視野に入れている仲間が、学び合う場です。さて、どのような学びの場なのか、ここでは参加学生の声をもとに、学習会の概要を紹介しましょう。

次の声は、“あなたにとって「教採関係学習会」はどんな場・時間となっていますか”の問いに、現在学習会に参加している仲間から寄せられたものです。

- 教採試験を見据えており、同じ教員を志す仲間と勉強する機会を得たいと思い参加しています。教職や子ども理解に関する基本的な視点を学べることや、集団討論の実践練習において「いじめ」や「部活動地域移行」など、今考えるべき議題について、自分一人では考えつかない意見を聞けることがありがたいです。（4年生Kさん）
- 一般企業を考えていた時期があり、4月頃から参加しています。初めて参加した回が集団面接形式でこんなに実践的なのかと驚きました。自分だけの勉強ではできない経験を得ることができています。（4年生Sさん）
- 3年次の教採前倒し選考に興味があり参加しました。知識不足であり難しいところもありますが、自分の考えを言葉にしたり、先輩方の考えを聞いたりすることで、参加してよかったと思っています。（2年生Mさん）
- 教採に向けて、どのように学ぶべきか分からなかった。同じような道を目指す仲間と学んでみたかったから。自分一人ではどこがポイントなのか、キーワードは何なのかが分からない。最近の流行（教育動向）を知ることができる。（4年生Oさん）



※ 面接対策プリント

私が大切にしていることは、“柔らかに自分のペース（都合）で学び合う”場とすることです。学びとはどんなところに生まれると皆さんは考えていますか。私は、仲間等の外界との対話を通して、自分との対話をすすめる中に生まれるものであると考えています。そのためには、自分の考えを吐き出し、吐き出すことによって自分にはない考えを取り込むことが求められます。このことを考えたとき、教採を視野に入れている学生は限られていることから、“学びにくさ”を感じているのではないのでしょうか。同じ道を目指す仲間と学び合うことで、“自身との対話”を活性化していく場として、活用してみませんか。

次に「教採関係学習会」の実際について4点紹介します。

- 1) **参加者の範囲**：3年次前倒し受験を考えている2年生から院の2年生まで多様です。途中からの参加ももちろん大丈夫です。“お試し体験”や、一般企業に就職後、教職を視野に入れている仲間の参加も歓迎です。
※一般企業に4年間勤務後、今年から教職に就いたとの嬉しい報告もありました。
- 2) **実施期日（曜日）**：各キャンパスにより異なります。教職相談室や各学部学務係へ問い合わせてください。
※特任教員が主な担当者としてかかわっています。
- 3) **参加の仕方**：それぞれの都合を優先してください。学習会資料の送付のみを希望し、見通しの中で役立てている仲間もいます。
※各回学習会資料を、事前にメール送信しています。
- 4) **学習会のサイクル及び内容**：3年後期（秋冬学習会：10月～3月）から4年前期（春夏学習会：4月から9月）を一つのサイクルとして実施しています。「秋冬学習会」では、教育法規・学習指導要領・生徒指導提要・求められる教員としてあり方等々、教採の基盤となる内容を、そして「春夏学習会」では、教職教養の過去問や面接・集団面接・模擬授業等、実践的な内容を中心に学びの場として提供しています。

どうでしょうか。少しでも関心のある皆さんは、自身のキャリア形成に向け、一歩踏み出してみませんか。最後に、教職相談室の先生方は、一枚岩です。どんなことでも、何かしら気になることがあったなら、声をかけてください。よい学生生活にしていきましょう。

（小松 寅雄）

編集後記

連日の猛暑の中、前期試験を迎える学生たちは学習の振り返りに余念がありません。図書館では、黙々と学習を進める姿が見られます。4年生は教員採用試験の二次試験に向けて、面接や模擬授業の練習のため教職相談室に足を運んでいます。夏の間もサポートは続きます。

（広報担当 橋本 萌）



**SHINSHU
UNIVERSITY**

Center for Teaching and Learning

Division of Teaching Profession

■〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1 ■TEL: 0263-37-3367 ■MAIL: kyousho@shinshu-u.ac.jp
■URL: <https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/kyoushoku/index.html>

